

# くまさんだより

豊橋東田教会

〒440-0055 愛知県豊橋市前畑町 112 ☎0532-54-3435

ホームページ toyohashi-azumadakyokai.org 武井恵一牧師 080-3428-3200

2018年

7月号

7月15日発行

イラストは全て池谷陽子さんご提供

## 7月8日 復活節第八主日礼拝説教

「父が命じられたこと」武井 恵一牧師

ヨハネによる福音書14章22～31節 新約聖書197～198頁



❖先週の礼拝説教で、ヨハネによる福音書のこの箇所は、主イエスの訣別説教ですと言いました。二つに分けて話された長い説教です。

けれど、それだけではありません。多くの方がご存じのように、ヨハネによる福音書には「ゲッセマネの園」の出来事がありません。言うまでもなく「ゲッセマネの園」は、主イエスがこの人間世界でもった最後の自由な時であり、主なる神様に血の滴るような祈りを捧げた場です。

❖実は、ゲッセマネの園で主イエスと一緒にいた——主イエスの近くに居ながら、眠りこけてしまった三人の弟子の中に、ヨハネによる福音書記者ヨハネもいました。

ヨハネは、自分もまた情けない状態で眠ってしまったことを想い起こし、ゲッセマネの出来事を割愛して、主イエスが最後近くに教えられたすべてを、ここで繰り広げました。

この意味を噛みしめながら、訣別説教と意識しながら、読み、主の言葉を心に受けますと、ここで主イエスが言われた言葉が現実の言葉として私たちに届きます。



❖今日の箇所は22節では、イスカリオテでない方のユダが、「主よ、わたしたちには御自身を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、なぜでしょうか」と質問しています。

ヨハネによる福音書14章22節

<sup>22</sup>イスカリオテでない方のユダが、「主よ、わたしたちには御自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、なぜでしょうか」と言った。

これは、多分、イエス・キリストを信じるすべてのキリスト者が漠然とであっても心に抱く質問と言えるでしょう。その意味では重要です。

❖主イエスはここで明確に答えられた。

ヨハネによる福音書14章23節

<sup>23</sup>イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしはその人のところに行き、一緒に住む。

これは、イエス・キリストが率直に話された弟子たちへの、わたしたちへの答えです。

この言葉が、ユダへの、そして、わたしたちへの答えです。 重要なのは、主イエスご自身が「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。」と言われたことです。

主イエスは、ご自身が現わされるのは、父なる神によってすでになされ、進められていると確

信されている。問題なのは「イエス・キリストを、知る」ことに止まらず「主イエスを愛し、主イエスの言葉を守ること」。こちらがはるかに大切だ、と主は言われています。

❖ここで、私たちはそれぞれ自分自身を吟味しましょう。自分のこれまでの人生を振り返り、自分自身の主イエスに対し、父なる神に対する在り方、そして、過去に経験した出来事を想い起こしてください。

「わたしは、主イエスを愛しています。」だけでは不十分です。

「イエス・キリストを愛し、主イエスの言葉を守る。実行する」これが、根本的に大切だ、と主は断言されている。

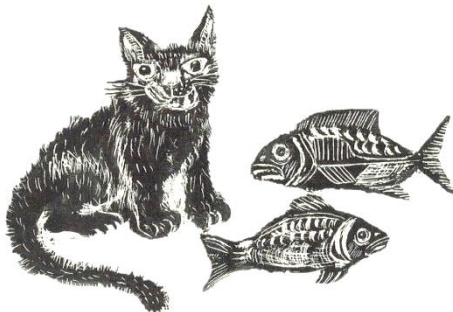
もちろん、それはとても困難です。私たちは、それぞれの「自分」が何よりも「自分自身」を先に立て、強く主張する。程度や内容の差はあっても、それは人間全体に言えることです。

私たちは様々な困難に出会います。そして、「このままでは、とても自分にはできない」、という経験を誰でも持っている、と私たちは知っています。

❖25節からの言葉は、私たちの現実を捉え、「新しい可能性を示されました」。

「可能性」というより、むしろ「蓋然性」という言葉の方が実際に合っている、と言いましょ。う。「蓋然性」は「可能性の確かさ」です。「可能かもしれない」ではなく、「確かに可能だ」を意味します。

「実現できること」です。今の場合「私たちが変えられ、主イエスの言葉を実際に私たち自身の生き方に実現できる」と現しています。それは、「聖霊の力」によります。



### ヨハネによる福音書14章25～26節

<sup>25</sup>わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。<sup>26</sup>しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。

私たちは「聖霊」を知っています。信じる者に、主イエスを告白した者に与えられる「神様の聖霊」は、教会に来ておられる皆様の多くはご存知です。

❖皆様一人一人のこれまでの人生の中で、「聖霊」を具体的に覚え、「聖霊によって何事かを実際に行うことがある」「聖霊によって、危機や困難を乗り越えられた経験がある方々」が、沢山おられることを知っています。いいえ、手を挙げたり、声に出してお応えくださる必要はありません。それぞれ、ご自身でこれまでの出来事を想い起こしてください。

その経験をほとんどの方がお持ちです。「未だ、経験したことがない」と思われる方は、お宅に帰り時間があるときに、ご自身の経験を想い起こしてください。

特に、その焦点は、楽しかったことではなく、苦しみ、悩み、傷つかれた経験、敢えて言えば、「絶望・死」を覚悟されたような、厳しい経験です。

❖「これは、自分自身が言い出したり、取り組もうとしても無理だ、出来ない」という経験です。

多くの場合。あなたは、そこで乗り越えられました。わたしは自分の体験から「そこに、聖霊の働きがあった」と、推測できます。私自身、何度か経験したからです。

どのような経歴の方でも、主イエスを信じた方には何かの出来事があった、とわたしは言うことができます。

けれども、「まだ、『聖霊の力』を実際に生きる上で体験されていない」方もおられます。受洗してまだ年月が経っていない方。「『聖霊の力、働き』を言葉だけの事として現実には信じられない」方。

無理はありません。私たちの世界は「事実だけが意味を持つ」＝「事実だけしか意味を持たない」と意識し、そこから考えるのが常識とされる世界です。神秘的、神がかり的、理想に先走りたくなる楽観的な考えは妄想的、とされる現実が「この世の常識」を支配しています。

しかし、改めてもう一度現実の世界歴史を思い起こしてください。「神様」が実際におられ、「主イエス・キリスト」が神の独り子として「現実の世界」に誕生され、『キリスト教を信じる人口が人類の30%を超えた現実』は何を意味している」のか。

事実こそ真実です。皆様どなたでも、「新しい自分」に向かって「聖霊」に求めてください。

現実の歴史は、主イエスの福音、「聖霊の——神様の計画」が存在しなければ、あり得ません。

✦主イエスは続けて次の様にわたしたちに言われました。

**ヨハネによる福音書14章27節前半**

<sup>27前半</sup>わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。

「平和」という言葉は口語訳聖書・文語訳聖書では「平安」です。平安は「心の・魂のもの」外的、社会的なものは二次的です。

主イエスは続けて

**ヨハネによる福音書14章27節後半**

<sup>27後半</sup>わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。と言われた。主は、人間の心が求める平安を与えと言われた。それは、父なる神の平安。イエス・キリストの平安。これにまさる平安はありません。

**ヨハネによる福音書14章29節**

<sup>29</sup>事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、その事の起こる前に話しておく。

「事が起る時」は、主イエス・キリストが祭司長たちの手下、更に、ローマ軍駐屯兵が加えられた勢力によって主イエスが逮捕される時は近づいている。主イエスは、その事を口にしました。この後は、もはや弟子たちに話すことも

出来なくなる。

✦以前にも、お話ししましたが、今、ヨハネによる福音書におけるこの時は、マルコ、マタイ、ルカ福音書で記されている「ゲッセマネの時」に当たっています。イエス・キリストの時は、ほんの僅かしか残されていません。

主イエスの言葉は続きます。

**ヨハネによる福音書14章30節**

<sup>30</sup>もはや、あなたがたと多くを語るまい。世の支配者が来るからである。だが、彼はわたしをどうすることもできない。

主イエスが「彼はわたしをどうすることも出来ない。」と言われたのは、「神殿ユダヤ教勢力・ローマ軍駐屯部隊によって傷つけら、十字架によって殺されることはない」と言われたのではありません。

この言葉は、誤解する恐れがありますので、少し付け加えます。

主イエス・キリストは彼らの手によって鞭打ちなど、苦しみを受けられ、嘲りを受け、更に十字架につけられて死に至ります。

しかし、その「死」は、肉体の「死」であって、イエス・キリストが父なる神に与えられた神の子の本性とも言うべき「命」は永遠の命であり、「主イエスの本来の、体は『霊の身体』、体というよりも、むしろ『永遠に生きる根本の存在』」です。『永遠に生きる根本の存在』は、何事によっても、どんな勢力によっても失われることのない「存在」です。父なる神、子なるイエス・キリストは根源の「存在」。





❖出エジプト記3章14節(旧約聖書97頁)にモーセが神様に会おう場面があります。この記事は、「神様=存在」について良く引用され、新約聖書でも用いられるところなので採り上げましょう。

**出エジプト記3章13~14節(旧約聖書97頁)**

<sup>13</sup>モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがひありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」<sup>14</sup>神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」

と記されています。

❖「わたしは在る」とは、「存在」ということで、これはキリスト教での一般的理解になっています。

先ほどの「この『存在』を、キリスト教信仰に立って付け加えますと、主イエスや三位一体の神様だけではありません。

水と霊とによって洗礼を授けられ、主イエスに従っているキリストを信じる者全部が、この「存在」として神の国に迎えられると約束されています。非常なことです。信じられないようなことです。しかし、わたしは現実として信じます。

❖主イエスの言葉は続きます。

**ヨハネによる福音書14章31節**

<sup>31</sup>わたしが父を愛し、父がお命じになったとおりに行っていることを、世は知るべきである。さあ、立て。ここから出かけよう。」

ここで、14章は終わっています。

こう言われた主イエスが、弟子たちと共にどこへ向かわれたかは記されていません。

この14章が突然「さあ、立て。ここから出かけよう。」で、突然終わっていることについては、いろいろの解釈があります。しかし、それをご

紹介するほどのことでもありません。16章の終りか、17章の終りに「さあ、立て。ここから出かけよう。」が置かれるはずだった、という説があります。

いずれにしても、この言葉が主イエスの勇気をはっきり現わし、弟子たちも従う形になっていることは確かです。

私たちもまた、「立って」、与えられた働きに向かって進みましょう。聖霊の主は必ず支えられ、進むべき道を与えてくださいます。

祈り 讚美歌(21)505「歩ませてください」



新共同訳聖書

〔ヨハネによる福音書14章22～31節〕

<sup>22</sup>イスカリオテでない方のユダが、「主よ、わたしたちには御自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、なぜでしょうか」と言った。<sup>23</sup>イエスはこう答えて言われた。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしはその人のところに行き、一緒に住む。<sup>24</sup>わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。<sup>25</sup>わたしは、あなたがたといたときに、これらのことを話した。<sup>26</sup>しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。<sup>27</sup>わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。<sup>28</sup>『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る』と言ったのをあなたがたは聞いた。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。父はわたしよりも偉大な方だからである。<sup>29</sup>事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、その事の起こる前に話しておく。<sup>30</sup>もはや、あなたがたと多くを語るまい。世の支配者が来るからである。だが、彼はわたしをどうすることもできない。<sup>31</sup>わたしが父を愛し、父がお命じになったとおりに行っていることを、世は知るべきである。さあ、立て。ここから出かけよう。」

教文館 日本語対訳ギリシア語聖書

〔ヨハネによる福音書14章22～31節〕

<sup>22</sup>イスカリオテでないユダが、彼に言う「主よ、(疑問を導入する言葉)ご自身をわたしたちに現わそうとし、そして、世に(現わそう)としないとは、何ゆえそうなのか。」<sup>23</sup>イエスは答えた。そして言った「だれでも、わたしを愛するならば、わたしの言葉を守るそして、わたしの父は彼を愛する、そして、彼のところにわたしたちは行く、そして、彼と共に住む。<sup>24</sup>わたしを愛さない者は、わたしの言葉(複)を守らない。そして、あなたがたが聞くとおころの言葉はわたしの(もの)ではない。そうではなく、わたしを遣わした父の(ものである)。<sup>25</sup>あなたがた一緒にとどまっていたとき、これらのことをあなた方にわたしは言った。<sup>26</sup>しかし、助け主、(すなわち)父、わたしの名において、遣わすところの聖霊。それが、あなたがたにすべてのことを教える。また、わたしがあなた方に言ったところのすべてのことをあなた方に思い起こさせる。<sup>27</sup>平安をあなたがたにわたしは残す。わたしの平安をあなた方にわたしは与える。わたしはこれ世が与えるようにではなく、わたしはあなた方に与える。あなた方の心が動揺しないようにせよ。また、おびえないようにせよ。<sup>28</sup>『わたしは行く、また、あなたがたのところへわたしは帰って来る』と、わたしがあなたがたに言ったことを、あなたがたは聞いた。わたしをあなた方が愛しているなら、父のところにわたしが行くのを喜んでくれるはずだ。なぜなら、父はわたしよりももっと偉大であるから。<sup>29</sup>そして、今、その事が起こる前に、あなたがたに、わたしは言った。<sup>30</sup>あなた方と、もはや多くを、わたしは語るまい。この世の支配者が来るから。だが、彼はわたしに対して何の力をも彼は持たない。<sup>31</sup>しかし、父をわたしが愛することを、そして、父がわたしに命じたとおりに、そのように、わたしが行っていることを世が知るために、(このことが)起こる。あなた方は立て。ここからわたしたちは行こう。」

